

聖書:ダニエル書5章1～16節

説教:宮の器で飲む者

はじめに

南王国ユダの首都であったエルサレムは、BC605年に当時の大帝国であったバビロンに包囲され、神殿に保管していた財宝が奪われ、国の主だった人達は補囚というかたちでバビロンに連れて行かれてしまいます。少年ダニエルもそのひとりで、やがて彼はネブカドネツアル王に仕える者となります。この王は自分が造った金の像を拝もうとしない者を火の燃える炉の中に投げ込むような厳しい王であったのに、エレミヤ書を読むと、神は「わたしのしもべ、バビロンの王ネブカドネツアル」と呼んでいる箇所があって、それはどうしてか。今回は、その理由について考えました。人の目には、バビロン帝国の王としてこの世のあらゆるものを手にしているように見えます。けれども、神の目にはほとんど何も持たない人に見える。それでもただ一つ、聖霊の語りかけに対しては非常に正直な心を持つ人であった。それで結局、彼は天におられるいと高き神を知り、賛美する者に変えられていった。そのようなことを見ました。

今日開いている所は、ネブカドネツアル王の治世からだいぶ時間が経って、ベルシャツアルと呼ばれる王が支配していたときに起きた事件のことを扱っています。今回と次回の二回に分けて、ここに書かれている事について考えます。

1 ベルシャツアル

1) 父はナボニドゥス (バビロンの最後の王)

そこでまずベルシャツアルとはいったい何者であるのか。まずそのことをおさえておきます。おさえることは二つあります。一つ目は16節の「この国の第三の権力」と言っているところです。「どうして第二の権力」と言わないのか。調べると、彼の父の父親はナボニドゥスと呼ばれる人で、このときのバビロンの最高権力者でした。つまりナボニドゥスが本当の王さまです。ところが、ナボニドゥスは遠い外国に出かけて長いあいだ留守にしていたため、息子のベルシャツアルにバビロンの統治を任せ、実質的なバビロンの支配者という立場にある。それで「王」と呼んでいました。第一の位にあるのが父ナボニドゥス、第二がベルシャツアルですから、ダニエルに第三の権力を持たせようと語ったことはこれで筋が通ります。でも、ナボニドゥスが父親ならば、ベルシャツアルの母親が、

「あなたの父上であるネブカドネツアル王は」と言っているのは、どういうことか。

これが二つ目におさえるべき事です。調べてみるとベルシャツアルの母親は、ネブカドネツアルの娘であったらしい。ということは、ベルシャツアルはネブカドネツアルの孫になります。孫が祖父のことを「父」と言うのはおかしいのではと思う。ところが聖書では「父」ということばは、「父祖」とか「先祖」という意味としても使うことが多いので、別に間違っているわけではない。

ちなみにベルシャツアルが亡くなったのはBC539年ですので、ダニエルがバビロンに連れて来られてから66年経っていますから、このときのダニエルは80歳ほどであったと推測されます。

2) 人間の手の指が現れる

内容を見ていきます。ベルシャツアルはあるとき千人の貴族を招いて大宴会を催します。その宴会の最中に彼は、祖父であるネブカドネツアル王がかつてエルサレムの神の宮から略奪してきた器があることを思い出し、器を持ってくるよう命令します。やがて器が宴会場に運ばれてきてお客たちがそれで飲み、ほかの神々を賛美していたときです。5、6節。「ちょうどそのとき、人間の手の指が現れ、王の宮殿の塗り壁の、燭台の向こう側のところに何かを書き始めた。王は、何かを書くその手の先を見ていた。すると、王の顔色は変わり、いろいろと思ひ巡らして動揺し、腰の関節はゆるみ、膝はがたがた震えた。」

いま、なにか人間の手の指のようなものが見えたけれど、酒を飲み過ぎて酔ったのかも知れない。そんなふうは無視してもよかったはずなのに、千人もいる宴会場の中で、王ひとりだけ真っ青になってガタガタ震える出します。王はすぐに知者たちを呼んで、壁に書かれた文字の意味を説き明かすようにと命じます。しかし、彼らが読むことも意味を告げることもできないとわかったとき、王母の助言によってダニエルが呼ばれた。それが16節までの内容です。

2) ネブカドネツアルとベルシャツアルを比べる

1) 似ているところ

これと似たような話、どこかにありました。ネブカドネツアルの時に起きた事件がこれとそっくりです。2章1節です。「ネブカドネツアルの治世の

第二年に、ネブカドネツアルは何度か夢を見た。そしてそのために心が騒ぎ、彼は眠れなかった。」それで彼は呪法師、呪文師、呪術者、カルデア人を読んで夢の意味を告げるように命じるのですが、それができないとわかると、大いに怒り、たけり狂い、「知者たちをすべて滅ぼせ」と命じる。それで結局ダニエルが、王の前に進み出て夢の意味を説き明かしていった。ネブカドネツアルは夢で、ベルシャツアルは壁に書かれた文字という違いはありますが、話しの流れはよく似ている。

2) 違うところ

でもよく見ると違うところもある。祖父のネブカドネツアルは夢の解き明かしを通して、天のいと高きかが人間の国を支配し、実ここにかなう者をその上にお立てになることをやがて知るようになり、神を賛美する。ところが孫のベルシャツアルは、これは次回に詳しく見ることですが、壁の文字の意味をダニエルから教えてもらった直後に殺されてしまう。結末がまったく異なる。

聖書は不思議な書物です。祖父ネブカドネツアルと孫のベルシャツアルに起きた二つの出来事を比べることによって、なにかを私たちに悟らせようとしているのではないか。そのように考えます。

2 神

1) 神の宮の器で飲んだ

いったいそれはなにか。刑事物のドラマを見ていると時々「現場百編」あるいは「現場百回」ということばが出て来ます。これは聖書を読むときにも役立ちます。何か分からないことがあったら、事件が起きた現場に行つて何度も調べる。この場合であれば、5章2、3節あたりが事件現場にあたるわけですので、そこを読みます。「ベルシャツアルは、酒の勢いに任せて、父ネブカドネツアルがエルサレムの宮から持ち出した金や銀の器を持って来るように命じた。王とその貴族たち、および王の側室たちや侍女たちがその器で飲むためであった。そこで、エルサレムの神の宮の本殿から持ち出した金の器が運ばれて来たので、王とその貴族たち、および王の側室たちや侍女たちはその器で飲んだ。」

この箇所をよく注意して呼んでください。2節では「エルサレムの宮から持ち出した金や銀の器」とあり、3節にも「エルサレムの神の宮の本殿から持ち出した金の器」とあって、同じような表現が繰り返されている。正確には同じことばの繰り返しではなくて少し変えてある。2節は「宮」で、3

節では「神の宮」になっている。「神の宮に納められていたあの器、あの器で彼らは飲んだ」、ということ言おうとしているのではないか。どうもこのあたりに、ベルシャツアルが厳しいさばきを受けた原因がありそうです。

でも当時、このようなことはどこの国でもしていて、特に常識外れのことをしたということではなかったはず。ところが、エルサレムの神の宮の器に限って、それは絶対に許されない行為であった。それでベルシャツアルは殺されることになったようなのです。なぜ神の宮の器で飲むことがいけなかったのでしょうか。

2) 金の杯の設計図

天地を創造された唯一の神の宮にあった大切な器を、ほかの神々を賛美するために使ったのだから、罰が当たったのか、あるいははたたりがあったということなのか。もちろん聖書では、「たたり」というようなことはありませんからそれは間違い。5章後半に、ベルシャツアルが心を低くしなかったために厳しいさばきがなされたとダニエルが説明していますから、直接の理由はそこにあります。今日は、少し視点を変えて別の面から見ます。

そもそも宮に納められた金の杯が、なぜ造られたのか。そこを調べたら何かわかるかも知れません。それで第一歴代誌28章を開きます。ここには、高齢となったダビデがイスラエルの王座を息子のソロモンに譲り、神殿の建設をソロモンにゆだね、神殿の詳しい設計図をソロモンに渡す場面賀が書かれています。そのうちの17、18節です。

「肉刺し、鉢、壺は純金であるが、金の杯については、それぞれの杯の重さ、銀の杯についても、それぞれの杯の重さ、香をたく祭壇については、精錬された金の重さが示されていた。また、翼を広げて主の契約の箱をおおう金のケルビムの車の設計図も示されていた。」

主の契約の箱をおおう金のケルビムの車の設計図と、金の杯の設計図が同じところに書かれていることに注意したいと思います。金の杯は、あってもなくてもよいというものではなくて、主の契約の箱と強い結びつきがありそうなのです。そんな大切なものを、バビロン王の権威を誇る、人間の欲望のため使ったのだから、厳しいさばきがかかるのも当然だった、ということになる。

3) 主が飲んでくださった杯

では、金の杯にいったいどんな大切な意味があるのか。ダビデが示した設計図の意味がすべてわかるわけではありません。でも聖書において、杯が「苦しみ」とか「さばき」の象徴として頻繁に使われることを考えていくと、主があのかのゲッセマネの園で父なる神いに祈られた祈りにたどり着きます。ルカの福音書22章42節です。「父よ、みこころなら、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの願いではなく、みこころになりますように。」

ダビデが御霊によって教えられた設計図に従って忠実に造られ、エルサレムの神殿に置かれた杯。その杯が、私たちの罪を赦すために誰かが飲まなければならない苦みの杯とつながっているのだとするならどうなるでしょう。だれがその杯を飲めるのか。たとえ人が飲んでも、人の罪は赦されない。神のひとり子が飲んで初めて、私たちの罪が赦される。それほどの重い杯ではないですか。それを高ぶる心でこの杯でベルテシャツアルが飲んでしまった。それで厳しいさばきが下されたのです。それがもし、何もおとがめがなかったというのなら、金の杯はただの飾りに過ぎない。十字架の救いというのも、風に飛ばされるようなはかない約束に過ぎなかったことになる。

ベルシャツアルが膝を震わせ、顔色が変わるほど、そして彼に対するさばきが厳しいほど、神がどれほどに救いのみわぎを成し遂げようとしていたのか。主の十字架が浮かび上がってまいります。